

## 朱熹と孔子生知説

森 新之介

### 問題の所在

『論語』によれば、孔子は己の学歴についてこう語ったという。

子曰、「吾十有五而志<sub>二</sub>于学<sub>一</sub>、三十而立、四十而不<sub>レ</sub>惑、五十而知<sub>二</sub>天命<sub>一</sub>、六十而耳順、七十而從<sub>二</sub>心所<sub>レ</sub>欲、不<sub>レ</sub>踰<sub>レ</sub>矩」。

子曰、「我非<sub>二</sub>生而知<sub>レ</sub>之者<sub>一</sub>。好<sub>レ</sub>古、敏以求<sub>レ</sub>之者也」。

自分は十五歳で学に志し、卅歳で立ち、五十歳で天命を知り、六十歳で耳が順い、七十歳で心の欲する所に従い矩を踰えないようになった。生まれながらに知る者でなく、古を好み敏以て求める者だ、という。これらを信じれば、孔子は生まれながらに知っていた生知者でなく、学びながら漸く知っていった学知者だったということになる。

後漢の王充は「吾十有五而志于学」章に言及しつつ、神人は学ばずして知るが聖人は学を須つて聖人になるとした(『論衡』実知篇第七十八)。また中唐の韓愈と李翱は同章について、孔子が五十歳で天命を知ったのは易を学び窮理尽性したからだとして、やはり孔子学知説を採用した(『論語筆解』)。しかしこれらは数少ない例外であり、東晋の李充は「吾十有五而志于学」章を聖人孔子がその生知を隠して凡人と同じくし、童蒙を勉勵したものと解釈した(『論語義疏』)。王玉彬の言う如く「典型的『玄学』之見」である隠聖同凡説は、南朝梁の皇侃や北宋の邢昺にも継承され(『論語義疏』、『論語正義』)、宋初までの主流となった。

北宋以来の道学では、程頤や范祖禹、尹焞が孔子を生知者とし、張載と呂大臨は孔子の徳が実際にこう進んだとしたという(『論語精義』)。同学の大成者である南宋の朱熹は、前輩の諸説を「横渠用『做』実説、伊川用『做』仮設「説上」と整理することもあったという(『朱子語類』卷第廿三同章第卅九条)。

単純に『論語』所載の言から考えれば、孔子を学知者とすることが自然であり、孔子生知説は玄学の残滓でしかないかのようである。しかし朱熹は、漢唐諸儒の誤りを正そうとしつつも、本論で述べる如く旧来の孔子生知説を継承した。本稿では朱熹の『論語』解釈法などに着目し、その孔子生知説を取らざるを得なかった理由について検討する。

## 第一項 学而至聖と生知

そもそも道学者たちは、生知の聖人でなくとも学んで聖人に至り得るとする学而至聖論を共有していた。吾妻重二の言う如く、これは「道学者すべてに共通する前提であり、スローガンであった。「すべてに」というのは、誇張ではない」。

ただし学而至聖論は、学んで聖人に至り得るとする理論を裏付ける実例が乏しい。程頤「顔子所好何学論」(『河南程氏文集』卷第八伊川先生文四雜著)や朱熹『孟子集注』は、『孟子』尽心章句上下にある孟子の「堯舜性レ之也」「湯武反レ之也」という語を根拠に、帝堯帝舜を生知の聖人とし湯王武王を学知の聖人とした。しかし、聖人に至らなかつた孟子の言は根拠として薄弱であり、湯王武王が学んで聖人に至つたかは『尚書』など経書に明らかでない。李翱「復性書」上(『李文公集』卷第二)や程頤「顔子所好何学論」は、もし顔回が不幸短命に死ななければ聖人に至つていたとするが、仮定の説に過ぎない。そのため道学者たちには、孔子を学知者とし七十歳の従心を聖人の境地とし、学而至聖論の実例として利用するだけの十分な動機があつた。

だが前述の如く、朱熹は程頤などの孔子生知説を採用した。『論語集注』で「吾十有五而志于学」章について斯く述べる。

程子曰、「孔子生而知之也。言亦由<sub>レ</sub>学而至<sub>一</sub>、所以勉<sub>二</sub>進後人<sub>一</sub>也。〔…〕」。又曰、「〔…〕」。○胡氏曰、「〔…〕」。又曰、「聖人言<sub>レ</sub>此、一以示<sub>下</sub>学者当<sub>二</sub>優游涵泳<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>躡<sub>レ</sub>等而進<sub>一</sub>、二以示<sub>下</sub>学者当<sub>二</sub>日就月將<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>半途而廢<sub>一</sub>也」。愚謂、聖人生知安行、固無<sub>二</sub>積累之漸<sub>一</sub>。然其心未<sub>三</sub>嘗自謂<sub>二</sub>已至此也。是其日用之間、必有<sub>下</sub>獨覺<sub>二</sub>其進<sub>一</sub>、而人不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>知者<sub>上</sub>。故因<sub>二</sub>其近似<sub>一</sub>以自名、欲<sub>二</sub>学者以<sub>レ</sub>是為<sub>レ</sub>則而自勉<sub>一</sub>。非<sub>三</sub>心実自聖<sub>一</sub>、而姑為<sub>二</sub>是退託<sub>一</sub>也。

程子によれば、孔子が生知でありながら学により従心に至つたと言つたのは、後人を勉進させるためだ。胡寅によれば、聖人孔子がこう言つたのは、学ぶ者が差等を越えて進んだり、途中で廢したりしないようにするためだ。私が考えるに、聖人孔子は生知だがそれを自覚せず、己の進歩を感じることがあつたのだろう。自分は生知の聖人だと知りつつこう言つたのではない、という。

ここで「非<sub>三</sub>心実自聖<sub>一</sub>、而姑為<sub>二</sub>是退託<sub>一</sub>也」としたのは、もし邢疏などのように孔子が己の生知を隠したとすれば、虚言で人を欺いたことになってしまふからであろう。『論語』述而篇にある孔子の「二三子以<sub>レ</sub>我為<sub>レ</sub>隱乎。吾無<sub>レ</sub>隱<sub>二</sub>乎爾<sub>一</sub>」という言への註で、朱熹は「聖人体<sub>レ</sub>道無<sub>レ</sub>隱」云々という呂大臨の説を引いている。しかし、生知を自覚しつつ韜晦したとする単純明快な邢疏などと比べて、進歩があつたのではないがあつたかのように感じたとする朱熹の解釈は理解し難い。

また、「我非生而知之者」章への朱註は次の如くである。

生而知<sub>レ</sub>之者、氣質清明、義理昭著、不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>学而知也。〔…〕○尹氏曰、「孔子以<sub>二</sub>生知之聖<sub>一</sub>、每云<sub>レ</sub>好

レ学者、非<sup>二</sup>惟勉<sup>レ</sup>人也。蓋<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>而可<sup>レ</sup>知者、義<sup>レ</sup>理<sup>レ</sup>爾。若<sup>二</sup>夫<sup>レ</sup>礼楽名物、古今事変<sup>一</sup>、亦必待<sup>レ</sup>学而後、有<sup>三</sup>以<sup>レ</sup>驗<sup>二</sup>其<sup>レ</sup>実<sup>一</sup>也。

生知者は氣質が清明で義理が昭著で、学ばなくても知る。尹焞によれば、孔子が生知の聖人でありながら事あるごとに学を好むと言ったのは、他人を勉強させるためだけでない。生まれながらにして義理を知っている、礼楽の名物や古今の事変については学んではじめて実験できるからだ、という。

蟹江義丸は「尹氏が孔子を道德上の認識に就きては生知なりとせしは畢竟強弁に過ぎず」と酷評し、土田健次郎と垣内景子もそれぞれ朱熹の註釈は「説得力が不十分」、「いささか詭弁の感が否めない」としている。朱熹は「吾十有五而志于学」章について、門人に「此処亦非<sup>二</sup>全如<sup>レ</sup>是、亦非<sup>二</sup>全無<sup>レ</sup>実<sup>一</sup>」とも語ったという(『朱子語類』同章第卅二条)。全くそのようだったのではなく、全くそのようでなかったのではない、というこの語を王玉彬は「含糊之辞」と評している。

そもそも、聖人の自覚し得なかった心境を聖人でない後学が覚知し得たなどという主張は、荒唐無稽である。朱熹は何故このような荒唐無稽の説を敢えてしたのであろうか。

## 第二項 言行繫年の困難

結論を一部先取りして言えば、朱熹が孔子生知説を採用したのは、もしこれを採用しなければ儒学が

破綻するからであつたらう。

『論語集注』冒頭の「論語序説」は、『史記』孔子世家に依拠して孔子年譜を略述し、そこに言行の幾つかを繋年している。一例を挙げれば次の如くである。

昭公二十五年甲申、孔子年三十五、而昭公奔<sub>レ</sub>齊、魯亂。於<sub>レ</sub>是適<sub>レ</sub>齊、為<sub>二</sub>高昭子家臣<sub>一</sub>、以通<sub>二</sub>乎景公<sub>一</sub>（有<sub>二</sub>聞<sub>レ</sub>韶、問<sub>レ</sub>政<sub>二</sub>事<sub>一</sub>）。

魯の昭公廿五年、孔子卅五歳の時、昭公が齊に逃れ、魯は乱れた。そこで孔子は齊に趣き、高昭子の家臣となり、齊の景公と通じた。孔子が韶樂を聞き、景公に政を問われたのはこの時のことだ、という。

もし孔子の「吾十有五而志<sub>二</sub>于学<sub>一</sub>」云々の語を信じれば、孔子は少なくとも六十九歳まで聖人でなかつたことになる。そして朱熹の繋年に従えば、孔子が韶樂を聞き、凶らざりき樂を為すことの斯こに至らんとはと言つたこと（『論語』述而篇）と、景公に政を問われ、君君たり臣臣たり父父たり子子たりと答へたこと（同前顔淵篇第十二）は、未だ不惑にも至らず惑つていた時の言行だつたことになる。また、『史記』仲尼弟子列伝によれば顔回は孔子五十九歳の時に死んだというため、孔子の顔回への教えはすべて未だ耳順に至らない時のものだつたことになる。それでは絶対に正しい言行だつたと断言し得ない。

もし孔子の特定少数の言行が確実に六十九歳以前のものだということであれば、それらを除外すればよく、問題はさほど大きくないかも知れない。しかし孔子の言行の殆んどは、何歳の時のものか全く明らかでない。例えば、『論語』冒頭の「学而時習<sub>レ</sub>之、不<sub>二</sub>亦説<sub>一</sub>乎。有<sub>下</sub>朋自<sub>二</sub>遠方<sub>一</sub>来<sub>上</sub>、不<sub>二</sub>亦樂<sub>一</sub>乎。

人<sub>レ</sub>知而不<sub>レ</sub>愠、不<sub>二</sub>亦君子<sub>一</sub>乎」という語が、孔子何歳の時のものかを考証することは不可能である。朱熹は「論語序説」で、『論語』の憲問篇第十四「莫我知也夫」章と同篇「陳成子弑簡公」章は哀公十四年、孔子七十一歳の時のものだとする。逆に言えば、『論語』にある孔子の言行で従心以後と比定できるものはこの二章と「吾十有五而志于学」章くらいしかなく、それ以外はすべて耳順以前と時期不明の何れかということになる。

問題は『論語』解釈の如何に止まらない。『春秋』は獲麟があつた同年、七十一歳の孔子が作ったものだと言われたいとしても、朱熹は「論語序説」で、孔子が書伝礼記を叙し詩を刪り楽を正し、易の象、繫、象、説卦、文言を序したという一連の作業を、哀公十一年の六十八歳時以降のこととする。孔子の刪詩などは六十八、九歳の時のことかも知れないため、もし孔子生知説を採用しなければ『詩』『書』などが聖人の遺した経書と言いつても得るかも知れなくなり、儒学が破綻する。

これらの問題を朱熹が察知していなかったとは考え難い。自ら程顥程頤の語録遺文を編んだ朱熹は、二程語録の経書解釈にある不審箇所について「或是時<sub>二</sub>先後<sub>一</sub>」「或是未定之論」と述べ、早年未定の論の混入を疑う。土田の言う如く、朱熹は当時道学で盛んに作られていた「語録の魅力とともに危うさを熟知していた」<sup>8)</sup>。そして『朱子語類』に次の語がある。

夫子所<sub>二</sub>自作<sub>一</sub>者『春秋』而已。『論語』亦門人所<sub>レ</sub>記也。謂<sub>下</sub>「学<sub>二</sub>夫子<sub>一</sub>者只当<sub>レ</sub>看<sub>二</sub>『春秋』<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>当<sub>レ</sub>看<sub>二</sub>『論語』<sub>一</sub>、可乎。

(卷第百一尹彦明第十四条)

孔子の自著は『春秋』だけで、『論語』は門人の記したものだ。だからと言って、孔子を学ぶ者は『春秋』だけを読むべきで、『論語』を読むべきでない、などということになるだろうか、と。朱熹は、門人の記録とされる『論語』が孔子の自著とされる『春秋』ほどに信憑できないことを理解していたが、だからと言って孔子の道を学ぶためには『論語』を読まざるを得ないことも当然理解していた。

そして『論語』を読むとは、私意により一部だけを聖人の言行として選び出し、それ以外を捨て去るということであってはならない。繁年できない言行もすべて聖人のそれとして解釈するためには、孔子は生まれながらにして聖人だったと強弁せざるを得なかったのであろう。

## 結語

以上本論では、朱熹と孔子生知説について分析した。

『論語』で孔子は自ら生知者でないと呼んでいるが、古来生知者として解釈されることが主流だった。南宋の朱熹が孔子生知説を強弁したのは恐らく、そうしなければ孔子の言行の殆んどは聖人のものとして解釈することが不可能または困難となり、儒学が破綻するからであつたろう。宋代に盛行していた語録の危険を十分認識していた朱熹は、厳密な語録解釈法を『論語』に適用することの危険もまた認識していたに違いない。朱熹にとってその危険を解消するためのものが、孔子生知説であつたと考えられる。



註

本稿で用いた史料の書誌は以下の如し。引用では適宜字体と句読を改め、訓点や傍点、括弧を付し、改行を省いた。  
『朱子語類』、『朱子文集』、『孟子』、『論語』、『論語集注』：朱子全書（上海古籍出版社）。

(1) 王玉彬「聖凡之間…孔子的生命境界問題及其展開——以「十有五而志于学」章的詮釈史为中心——」、『哲学動態』2018・一〇、五二頁。「吾十有五而志于学」章の解釈史については同稿参照。

(2) 吾妻重二「道学の聖人概念——その歴史的位相——」（第二部第一篇第一章、初出2000）、『朱子学の新研究』、創文社、2004、一五一頁。学而至聖論については同稿参照。「聖人可学論」という呼称が普及しているが、近藤正則の聖人可学と聖人可学而至は必ずしも同義でないという指摘（「聖人学んで至る可し」の根底にあるもの——程伊川の思惟様式における「対」の特質——）、『日本中国学会報』五四、2002、一六八頁）に従い、本稿では「学而至聖論」と称する。

(3) 蟹江義丸『孔子研究』、金港堂書籍、1904、二一六頁。

(4) 土田健次郎『朱熹の思想体系』、汲古書院、2019、四〇頁。

(5) 垣内景子『朱子学入門』、ミネルヴァ書房、2015、二〇〇頁。

(6) 王玉彬「聖凡之間…孔子的生命境界問題及其展開」（前掲）、五三頁。

(7) 朱熹「答石子重」十一（『朱子文集』巻第四十二）、『朱子語類』巻第九十七程子之書三第十四条。なお、朱熹は記録者の曲解誤録も大いに疑う。

(8) 土田健次郎「道学資料の独自性」（序章第二節第二項、初出2000）、『道学の形成』、創文社、2002、二二頁。

付記 本年三月、土田健次郎教授が早稲田大学を定年退職する。本稿をその机下に謹呈し、玉斧を乞うとともに学恩の万一に報いたい。